

essais こころみ 2024年8月

2024年8月1日(木) 晴れ

今日も朝から強い陽ざしで、37℃まで上がる予報。5時半ごろから蝉が鳴きだし、にぎやか、暑さ感が増す。5日は土用二の丑、もう一度うなぎ？

— 読む —

CMで「カラダはあなたの食べたものでできている」といのがあった。これに倣えば「精神はあなたの読んだものでできている」といい面もある。特に読書について、数年前からじわじわとその感がつよくなってきた。

あとあとまで内容を憶えているわけではないけど、読んだ時点での受けとめが極小の種となって、精神空間のどこかに埋まる。一冊読むごとにそれをくり返し、時間差で芽が出てくる。

10代半から数は読んでいなくても、30年も経つと、それ相当の大小の花や実ができてはらずで、さらに40年、50年となると、「精神は読んだ本でできている」といっても、たぶん差し支えない。

人間は、知らないフリはできても、『いったん知ったことは知らなかったことにはできない』(マーヴィン・ミンスキー)。だから、本だけでなく、ネットにあふれるニュースやトピックなども、何を自分に読ませるか、慎重に選んだほうがいい。

最近ニュースを見ないようにしている人が増えているとBBCが伝えていた。そうした方がいいなあと個人的にも最近感じた、記事の中には精神を穢すようなものもある。頭にまとわりついて、なかなか離れない。

これはいけない。すぐにアクセスできるからといって、気軽にサイトを開くのはやめよう。オーソドックスで「スロー」をうたうサイト2つに限定してチェックすることにしたのだった。

2024年8月3日(土) 晴れ

大阪市内はしばらくまとまった雨が降っていない。いつ以来か記憶もない。週間予報では来週は曇マークが並んでいるが、さてどうか。明日4日は旧暦7月1日、7日水曜は「立秋」。雨ふって少し涼しくなってくれば…。

— 無用、有用 —

今朝読んだ『アリアドネからの糸』に、「フラッシュバック」は、「元来は病的なものでなく、〈古型の記憶〉」で、「人類史の古い時代には今より有用だったであろう」という箇所があった。

さらに現代でも、「封筒を開けて意外な絶交状を手にした時など、この型の記憶になる」、「もっと平凡には入学の通知とか…」。「かりにこの型の記憶がまったくない人生を想像すれば、それはのっぺらぼうな人生に違いない」。

小学6年生になったばかりの時に、エンストした車がハンドル操作を誤り、玄関先で家に向いて立っていた自分に鈍くあたったあの時の一瞬は今も身心残る。3ヶ月入院し、退院してしばらくは電車に乗るのも怖かった。

3ヶ月も入院して、今でこそわかるが、相手に補償能力が無く、かつ、当時はまだ制度が整っていなかったから、両親はかなりの負担になったのではないかと。そんなことは大人になるまでまったく考えもつかなかったけど。

事故で今も左足は右足と温度の感じ方が違い、夏でも微妙に冷える。激しい運動は退院以降したことがないから、柔軟性はずっと保っているが、動きの多い運動はまったくダメ。

現実問題としては、事故自体は無用なものであった。しかしものすごくマイナスでとらえているかという点、そういうことがない。入院中の出来事が自分の中でプラスのエピソードとして残っている。大人になってからふり返る象徴的な場面がある。

中井先生のいうように、〈のっぺらぼうな〉人生にはならない素材となっている。自業史に有用性をもたらしている。この事故以外にも同じようなことがいくつかある。無用なようで、有用であると思えるところがミソかもしれないが。

2024年8月5日(月) 曇・晴

昨夕遠くで雷鳴がひびいていた。ようやく雨が降るか期待した。でも曇り空のままだった。今朝ベランダが少しぬれている感じだったから夜中にちらっと降ったか、かえって蒸し暑くなり、月曜から体力をうばわれる。今日は「土用二の丑」とか。

— 「エピファニー」 —

いろいろと初めてのことを教えてもらう。今朝も「中井久夫」の本を読んで、「エピファニー」を知った。すぐに調べて、「セレンディピティ」との差異が気になった。

「セレンディピティ」は6月の「リーズレター2024夏至」で取り上げられ、知ったのはずいぶん前だから、概念は理解しているつもりだった。

ためしに生成AIに両者の簡潔な説明を問うと、「エピファニーは突然の気づき、セレンディピティは自然にうまくいく偶然の出来事を指します」。

辞書には、「エピファニー：《元来は、キリストの顕現の意》文学で、平凡な出来事の中にその事柄・人物などの本質が姿を現す瞬間を象徴的に描写すること」。

「セレンディピティー serendipity」の方は、「求めずして思わぬ発見をする能力。思いがけないものの発見。運よく発見したもの。偶然の発見。[補説]英国の作家ホレス＝ウォルポール(1717-1797)の造語」。

どうやら、夏至のレターに書いた、ある日突然の自分自身の未来への
気づきは、「セレンディピティ」というよりも、「エピファニー」の方が合っ
ている。たぶん過去なんどかのエピファニーによって、今がある。

人間の感知、感受する、感覚的なものごとの言語化しにくいものを概
念化して遺してくれる。人間の知のすばらしい側面、後の人の知の発掘
を助ける。

2024年8月7日(水)立秋 曇→晴

昨夜まとまった雨がふった。室外機も水浴びして、クーラーの効きがよ
かった。今日は立秋、でも猛暑はつづく。エアコンなしですごせる季節が
待ち遠しい。

— 語るべきもの —

転機には伏線があって、そこに物語るべきものがあり、人生の新しい物
語が始まる。先週29日クレオ大阪中央館であったセミナー『編集者に
学ぶ…』の講師の方もそう、子育てが一段落し、編集者見習いとして再
就職するまでの経緯に、呻るものがある。ご本人ならではの感。

いつかラジオで座談会の番組をやっていて、たまたま聴いた。
著名な建築家で今はもうけっこう高齢な方と、たしか文化人類学
者だと記憶している。

司会者がまず建築家に日本の今の文化レベルに関するような質問を
して話をふったのだが、のっけから自身の建築家前期を語り始め、それ
がなかなか終わらない。

察するところ、質問されたことに問題意識が強く、過去から現在の社
会変化などもふまえて答えようと、自分の過去の時代の話から切り出し
たが、語りたいたくさんあって、回廊に入ってしまった。そういうこと
ではないか。

思いがけない偶然や特別な経験、はたまたふってわいたようなチャン
スや自分自身のヒラメキなど、それらがあったから、物語が始まったとい
うのが常。時間が経てばたつほど、その伏線に不思議さを感じるもの。

個人的な経験からも、そういうこともわかったから、仕事上で語りだし
たら終わらないという人に接しても、よほどなければ遮らない。気持ちが
わかるし、愛おしくなる。

そういえば、いま物語の何章目かの途上にいそうな人が何人か頭にう
かぶ。いずれ語るべき時のために、いずれ総まとめしたくなる時のため
に、〈いま〉を記録しておくことを勧める。

2024年8月7日（水）立秋 午後5時半ごろ、「女性チャレンジ応援拠点」

担当日のこの日、東側一面透明のガラス窓から、西日が構想マンションの窓枠かに反射し、室内を照らして…。
日の入りがまだ遅いので、今はまだ明るいですが、そのうち暗くなり、季節のすぎるのを感じるのです。



2024年8月9日（金）晴

昨日の朝、暑さの感じがすこしかわった。なんとなく秋を感じた。日中は猛暑だけど、立秋をおかえて、朝晩の空気は肌馴染みがよくなってきそう。それだけでも、ありがたい。

— 葛藤を手なずけて —

これから自分の世界を拓こうとする人は自問が多くなる、葛藤がついてまわる。発奮材料に、ものの本によれば、「人に簡単に理解されるなら、たいした生き方でない普通の人」。

そんな風にはげまして、後押しする人の中に、自他ともの観察に熱心な人が少なくない。葛藤をうまく手なずけて、自分を育む糧にして、自分ならではの道をつけない、そんな気持ちからか。

そこで観察の対象がこちらに向くときもある。「なぜ、そんなことがわかるんですか、どういう風にすれば、そんな見立てができるんですか？」。

そう尋ねられて、まず答えるのは、「なんとなく」わかる。もうすこし言えば、その人の話した内容、話し方、声の感じ、全体的な雰囲気、等などによって、直感的にみえてくるものがある、ある種の直観といえるかもしれない。

五感の情報経路のうち、個人的には、聴覚は少し人より優位だろうと自覚している。20代半ばの時に、ヘッドホンからの音に気持ち悪さを感じて付けられないことをわかった時から。

過去に聞いて印象にのこったこと、ちょっと耳にはさんだこと、それがけっこう大事な材料となり、判断の肝になっている気はしている。なにより聴きながらその内容を頭の中で展開するタイプ。だから、面談でメモはとらない、数字的なこと以外は。

この話を聴いていた一人が、「わたしは視覚の方が優位だと思います…」。そう、人それぞれのように、一様ではないところに自分ならではの道も拓こうというもの。ふたたび次の言葉を、

『わたしは願っている。わたしが覚えたことを倣いながら、あなたも自分の力で求めるものに到達できることを。生きよ、そして健やかなれ』
(ルドヴィーコ・ヴィンチェンティーノ 1522年)

2024年8月12日(月) 晴

今年のお盆休みは9連休という人が多いらしい。こう暑いとヘタに動くとかえって疲れる。子どもがいると、じっとさせてもらえないだろうけど。ともあれ、8月がすぎると年末まで一気、今のうちに英気を。

— ポーとしていても —

連日熱中症アラートが出るほど暑いから、余計な何かをする気にならなくても仕方ない。昨年の経験から、それでもよしとするように、今年の始めから考えていた。必要以上のことには夏までに挑み、慣らして、態勢をととのえ、夏はただそれを維持するだけにする。

余計なことは何もしてなくて、ただポーとしていても、頭の方では何か浮かんでくるから、けっこうユニークな収穫がある。安静にしている時ほど活発になるという脳の領域、デフォルトモードネットワークの効用だろうと思う。

たとえば土曜日の朝、たぶん過去に思い出したことは一度あったかどうか、子どもの頃に通った算盤教室の年上の男子のことが浮かんだ。そういえば淡い気持ちを持っていた。はるか昔のそんなことを思い出しながら、われながらびっくりした。

そのあとしばらく時間がたって、今度はじわりと閃いたことがある。自分に課した一つの大仕事について、一つの方向性がうかんだ。“そうか、そういうつもりでやればいい…”。あいまいだったスタンスがはっきり見えたのだった。

7日の立秋以降、朝晩の暑さが少しやわらいだ。夏のおわりはまだ先だろうけど、朝晩はその走りを感じられる。ポーと、身心を解放しているから、『少年時代』のような郷愁というか、『老子』のいう宇宙観というか、そういうものがユニークな収穫を誘ってくれたのかもしれない。

2024年8月14日(水) 晴

熱中症アラートがずっと出ていて、今日は37℃の予報だったけど38℃にかわっている。台風もまた近づいている。はやく秋がきてほしい。

— 風情 —

夏の花火大会も大きなものがだいたい済んだか。どこかの有名大会では、周辺を黒いテントで目隠したところがあった。ニュースで知ったが、夜空高く侘び寂びの美しい花火をあげるのに、下界はなんとも無粋。全体を俯瞰するとちょっと滑稽な感じさえる。

人がたくさん押し寄せる祭りも花火大会も、世の中が一斉に休む時の旅行も、自分では行かない。一人で行動する年齢になってからずっとそうだから、もってうまれた性分。

いつか妹夫婦友人4人のスキー旅行に斑尾高原へついていったが、着いたと同時に一人で帰った。おもちゃ箱のようなペンションの並ぶ光景に、妙な違和感。自分の身をおく場所でない感じがこみあげ、「わたし、帰るわ」。妹は心得たもので、「わかった、気をつけて」。

おどろいたのは他の3人だが、二人のやりとりを見ていて、自分たちに気分を害してではないようだけど…と怪訝な表情で見送ってくれた。当然身内と一緒にだからできたことだけど、それでも理解できない行動だという人もいるにちがいない。

祭りも花火も旅行も、もちろん体験したい。それらを愉しむ状況設定、それを重視しているのかもしれない。風情をあげ、そこで何かを感じ、ずっとあとあとまで印象として残る何かを、もたらしてくれるような状況。たぶん、昔から「お一人さま」で行動するワケがそこにある。

斑尾高原からの帰りは長野へ出て、善光寺を訪ねて、大阪へ戻った。山門、本堂までの長い石畳が今も印象に残っている。

2024年8月16日(金) 曇り

朝一番は晴れていたけど、台風の影響か、雲ってきた。雨、風はどうだろう、今夜は京都五山の送り火。行事は夏の終わりへと進んでいるけど、まだまだ真夏の暑さが続く。

— どの狭間? —

今朝北浜駅直結のスーパーで水を買おうとおもったら、棚にまったく無かった。炭酸水などはあるけど、ミネラルウォーターだけがごっそり抜けている。これは買いためのせいかな。

考えてみれば、水道水でもいい。ただ古いビルの場合は、ちょっと気にかかる。蛇口から出る水は上水道から直接きているわけではないだろうから。それでも沸かして使うなら、大丈夫か。

ペットボトルのお茶が世に出た時は、「お茶までも?!」とほとんどの人が驚いた。そんなので飲みたくないと言った人もいる。コーヒーも紅茶も、あれもこれも、出来合いの小分けにされた。そのおかげで、災害時などはたくさんの人に一気に急場をしのぎのモノを提供できるということもある。

だから嗜みというか、平時から節度ある行動につとめたい。イザという時にせめて自分を少し抑制できるように。ところで聞くところ、お米もスーパーに無いらしい。

乱高下する日経株価、サル痘の感染拡大、その他もろもろ、目に耳にする日本と世界のニュースに、今わたしたちはどの狭間にいるんだろう、何か重大な局面の前兆のただ中にいるのか、そんなことが頭に浮かぶ。

2024年8月19日(月) 曇り・雨

ほぼ晴れが続いていた大阪、今週は曇と雨マークが並ぶ。今朝一番はオレンジ居ろの朝焼けがひろがっていたが、みるみる雲が多くなった。気温は31℃どまりだけど、蒸し暑さが堪える。あーあ。

— 第14期 —

先週土曜17日から『プロ講師になろう塾chance2024』が始まった。10月5日のプレゼンまで、受講者のみなさんは試行錯誤、悪戦苦闘がつづく。でもその先にはチャンスが待っている。『チャンスは心構えてきている人だけひいきする』(パスツール)

この塾が初めて開講されたのは2007年だった。「習う側から教える側へ」、そう考える女性が最近ふえてきたので企画してみましたと担当者の方から講師の打診を受けた時、社会のすそ野で女性たちをたくさん支援している機関ならではだなあと感心した。当時は他でやっていないようなセミナーだった。

中身もボリュームがあり、30時間もあった。手とり足とりという感じで、おまけに受講料は無料。応募は定員の倍以上あり、当初の定員は増やされたけど、半数は落選した。初年度初日を迎えた会場の壮観さは今も印象に残っている。

主催者も講師も、“こんなに色々なことにアプローチしている女性たちがいたのか…”と目をみはった。受講者同士も、自分以外にこんな孤軍奮闘している人がいたのか…と励まされ、勇気づけられた感じだった。

初日の熱気は最終回プレゼンでピークに達し、終了した時には、やりきった感でハイになり、なんともいえない高揚感に包まれた。会場の室温が上がったんじゃないかと思うほどだった。

初期3年続き、2014年からはアドバンスとして開講され、今年度で14期。ここから活動の場を広げた人も少なくない。受講者同士の交流も続いているし、たぶん今年度の人たちも、新しい人的ネットワークができて、たがいの仕事と人生をクリエイティブしていくはず。数年後がたのしみ。

2024年8月21日(水) 曇・晴

今週は曇りがちのお天気、今日は時々晴れ間ものぞく。気温は35℃まで上がるとか。朝一番でもかなり蒸し暑いのに、それでも虫の音が聞え始めた。佐藤弘樹さんが言っていた、「自然は律儀」。

— 眩しい —

高校野球も今日が準決勝、2試合目がいま進んでいるよう。昨夜つい見てしまった高校生たちの頑張り、かるた部とマーチンバンド部の精鋭たち。やることに真剣で、自己管理ができていて、でも話せば屈託なく、“いちばんいい頃だなあ…”と大人の目には眩しい。

大人になっても、同じ大人からみて眩しい時期の人がいる。これまで一番印象に残っているのは、政府系金融機関の職員から伝統工芸の世界に入った女性。友人のまた友人で、関東から京都へ移住し、修業に入ったばかりの時に紹介された。

小柄でショートヘア、化粧っけのない肌がつやつやして、未知の世界へ入った緊張と不安と希望があいまったような表情がキリリと見えた。全体として、なんというか、神々しい感じさえた。

転機や節目というものが誰にも訪れる。そこで意を決して、大きな変化をおこした人に、同じような雰囲気醸し出される。本人の内面はけっこう混沌としているのだけど、新しい扉をひらいたエネルギー、パワーがあつてのことだから、人の目に輝いてみえる。

そこでまた思ひ出す、次の言葉。

「前の時間がそのまま流れているのは滞っているのである。切って、捨て、脱落して、新しく生まれるからこそ生きているのである。「間」というのは、この生きていることを確かめる時間の区切り、切断、響きなのである」(中井正一)。

2024年8月23日(金) 晴

これから夏が始まると錯覚するほどの陽ざしと暑さ。疲れを口にする人も多い。屋内のほとんどはクーラーが効いているから、なんとかしのげる。予報の最高気温に20℃台が出るのはいつになるか…。

— 情的にわかる —

2017年の5月14日朝に読み終えた「岡潔」、先日から再読を始めてまだ第一章に入ったばかりだけど、今朝読んだ箇所「老子」が出ていて、やはり時間の経過は無駄に過ぎていないと感じた。

「岡潔」は情あつてこそ、知と意があるという。辞書で情を調べると、7つの意味が出てくる。その1の意味をあげているのだろうけど。

1 物に感じて動く心の働き。感情。2 他人に対する思いやりの気持ち。なさけ。人情。3 まごころ。誠意。4 意地。5 特定の相手を恋慕う気持ち。愛情。6 事情。いきさつ。7 おもむき。味わい。趣味。

「何も知らなくてもうれしい時はうれしい、悲しい時は悲しい。情さえ健全なら、人生を送るにさしつけない」。

「情的にわかっているものを知的に表そうとすることで文化はできていく。情の働きがなければ知的にわかるということはない」。

まず「情的にわかる」というのは、人間関係においても言えるのではないか。初対面の、まだ会話をかわしていない時点でこちらがその人に感じる何か、みてとる印象、あえていえば人間性の大枠のようなものを掴む。

はっきり「わかる」と意識してはしないけど、直感したものがある。もちろん相手も同じで、そのあと自然に親しく話をするようになるか、ちょっと引き気味に話するか、等などの違いになって表れる、おがたいに。

話がさらに進めば、いろいろなことを知ることで、決定的になってくる。しだいにワケがわかってくる。情的にわかることがあながちズレていないこと、もっといえば正しかったことがわかってくる。

仕事柄、そういう場面を何度も経験してきて、個人的には貴重な社会勉強となっている。それがまた仕事にいきている。

2024年8月26日(月) 晴から曇へ

台風の進路が気にかかる。近畿を直撃しそうでけど、タイミングはいつになるのか、法事の日にあたるのか、もろもろ準備があるので、さてどうしたものか。

— いきつづく —

先々週だったか、「高石ともや」の訃報を新聞でみた。おもわず声をあげた、二度見した。あらためて調べてみると8月17日享年82才。『宵々山』をはじめ、何度かコンサートに行った。

次いで先週だったか、「松岡正剛」の訃報が載った。そんなに親しみがあつたわけではないけど、一冊だけ手にした『フラジャイル』。

なぜこの本だったか今でははっきりは憶えていない。たしか過去の手帳にメモしたあつた。出して、「本」のところを開くと、1999年5月25日づけでメモしてあつた、『フラジャイル 弱さからの出発』(筑摩書房1995年)。

このメモの上には、『鉄腕アトムと晋平君』(渡辺信一 ミネルバ書房)。こちらは読んだ記憶ははっきりある。下にも、つづけて10冊のタイトルが並んでいる。

事務所をもった1995年から初期3年、その後3年、計6年の知へのアクセスは、われながら瑞々しかった。当時を思い出すと、今でもその感覚がよみがえる。

それもこれも、そう導いてくれた人の出会いがあつたから。先方は、そうだったとは全く想像していないだろうけど、こちらが得たものは大きい。おカネは使ったら無くなるけど、知はむしろ枝葉を増やしてくれるから。

親しみを感じた人たちの訃報には、おどろき、感慨深いけど、自分の歴史の中に精神とともに生きて、中には膨大な書き物を残した人もいる。だからずっと生きつづける、自分の中にもこの世にも。

2024年8月28日(水) 晴から雨へ

午前8時前後はすっきりとした青空が広がっていた。徐々に雲がひろがってきて、午後のいつか雨になりそう。台風の進路に翻弄され、前もって予定変更したことがそのままでもよかったけど、仕方ない。さて31日の塾は実施できる？

— 才能 —

才能を辞書でしらべると、「物事を巧みになしうる生まれつきの能力」。たとえば、『無意識にやって人に喜ばれること、それが本物』（佐藤初女）という、その本物とは才能のことではないか。

「才能とは自然のうちに湧き起こる一種のパワー」という哲人もいて、『好きこそもの上手なれ』に通じ、今なら『博士ちゃん』がそのわかりやすい典型。才能をうまく発揮できる環境をつくった親・大人がえらい。

好きなことを職業にできれば人生の質を高めるに違いない。仕事で出会う人の中には、社会に出るとき親の言いつけて好きな道は諦めたけど、人生後半、このままでは終われないと意を決した人も少なくない。

自然のうちに湧き起るパワー。けっして目にみえて激しいものではなく、無意識だけど、気持ちが自然に傾くものやこと。個人的には、「パーソナル・アシスタント」はそんな程度で生い立った。

でもしだいにわかってきた、もってうまれた才能に合った状況をつくってきたんだと。試行錯誤、孤軍奮闘のあれやこれやも、限りなく少数の善き理解者との出会いも、今では腑におちる。

もってうまれた才能が必ずしも世の中の多くの人に理解されるとは限らないけど、誰かの役に立つものやことであれば、理解者には20%の確率で出会う、実際の蜜な関係性は4%の確率で築ける、経験則から。

意を決して一歩ふみだし、まだ混沌とする時期は誰にもある。でも、自然のうちに湧き起るパワーは持続力がある。一時的にめげても、回復ははやい、思考も働く。やはり『好きこそもの上手なれ』。

2024年8月30日(金) 晴から雨へ

朝の段階ではなぜかよく晴れている。お昼前から雨になりそうだけど、台風の進路はさてどうなるか。ひょっとすると明日は予定どおり塾の開催はできるのかも。

— 実践の場 —

女性たちへの支援に問題意識が芽生えたのは2005年だった。バブルの後遺症から少し明るさが見え始めた時期だった。

大阪市のかつての『あきない・えーど』のサポーターとして窓口相談を担当していた時、相談者に女性が目につくようになった。加えて、事業テーマに先見性をみた。既存のパラダイムから逃れられない当時の男性経営者たちの多くとの違いをみたのだった。

何かを始めようとする女性たちを後押しすることがこれからの社会のためになる、そう感じたのだった。そうすると不思議なもので、まもなくして、ある機関から女性対象の起業塾の依頼がきた。

そうこうして様々な機会を得て、女性たちに向けた「パーソナル・アシスタント」実践の場を得られているのは仕合せなことである。先日はじまった『プロ講師になろう塾』もその最たるもの。

過去にこの塾を受講して、チャンスに恵まれ、着々を自分の道を進んでいる一人が近況報告に『女性チャレンジ拠点』担当日に訪ねてくれ、「前から一度聞いてみたかったですけど、10年以上も同じ塾をされて、そんなに続けられるのは、どうしてなんだろうと…」。

答えはシンプルで、講師のためのものではなくて、受講者のための塾だから続く。自分ならではの仕事と人生を探求する女性たち、世代交代していきながら、次から次へとそういう女性は出てくるから、続く。

塾は一つの足がかり。参加した一人ひとりの受講者は、探求の想いをカタチにするにはどうしたらいいかを、限られた時間ながら、徹底的に考え、アウトプットする。講師はそれをアシストする役目。

「それがすごいです」と言ってもらったが、たぶんそれは、前回の話題に通じ、『好きこそものの上手なれ』なんだろうと思う。自分に合うことができていて、感謝。

2024年8月31日（土） 台風10号の大きな影響もなく、夕方にはこんな空

